

来する問題把握が反映しているのであるが、評者に言わせれば、このようには定式化できないオッカム哲学の姿勢こそが、我々の同時代の論理的意味論に対して、オッカム研究者が提案することができる論点の一つである。

しかし、このように評者が対決的に論じるのは（また今後も様々な機会に論じたく思うのは）、本書を高く評価すればこそである。今後本書の多くの論点に関して、その吟味が諸研究者によって引き継がれ、検討されることがおおいに期待される。本書は、そのように読まれ、論じられることを期待する姿勢でこそ書かれており、またそれに価するものとなっている。

山田晶・倉松功編著

『キリスト者の敬虔——印具徹先生喜寿記念献呈論文集』

ヨルダン社，1989年 ix+p. 269

岡野昌雄

本書は、副題にあるように、印具徹博士の喜寿を記念しての献呈論文集である。8編の論文と、博士の特別寄稿2編の、合計10編が収録されている。編著者の一人である倉松功氏は、「あとがき」の中で、「日本のキリスト教界では、この敬虔という言葉は余り用いられない。のみならず、敬虔主義や体験主義の主観性や人間中心主義に対する弁証法神学の批判の影響もあってか、敬虔されてきた。しかし、敬虔はキリスト教の、特に、キリスト者の宗教性にかかわる中心問題であることに変わりない」と述べているが、これは当を得た指摘であろう。そのことは、他の宗教においても同様かもしれないし、さらにわれわれは、古代ギリシアにおいても、エウセベイアないしホシオテースが正義や知恵、勇気と並んで主要な徳の一つとされていたことを、思い起こすことができよう。その意味でも、本書は興味ある一書である。以下に各論文の簡単な紹介とコメントを記しておく。

『古代ローマにおける「ピエタス」思想の発展』と題する山田論文は、なかなかの力作である。自己と自己の根源である両親、祖国、神々との間の、自然の情愛としてのピエタスが、努力して実現すべき徳として、倫理や法律として客観化される。さら

に、それが、ラテン・ローマからイタリア・ローマ、ヘレニズム・ローマへと世界が拡大する過程で、民族、宗教、言語の別を越えたコスモポリスの住民として等しく礼拝すべき「ロゴス」の神に対する「新しいピエタス」へと展開して行き、そしてストア哲学によって論理的基礎を与えられる。

他方、そうしたヘレニズム・ローマ世界の中で、ユダヤ民族は、自然の情や道徳に反すると思われることであっても、神の命ならば絶対に聞き従うという、独自のピエタスの体系を保持していた。そして、それがストア哲学を媒介として普遍性を与えられる例を、フィロンによって示しながら、しかし、ストア的な「世界のロゴス」ではなくて、あくまでも「神のロゴス」に従って生きるピエタス、すなわちロゴスを超越する父なる神に対するピエタスという点にその独自性を見出し、やがてそのロゴスが肉をとってこの世に宿ったという、「肉をとったロゴス」としてのイエス・キリストを原点とするキリスト教において、ピエタスの体系がどのように展開して行くかを課題として残しつつ、本論文を閉じている。

はじめに断り書きがしてあるように、この課題の部分がむしろ本文に予定されていたのであり、したがって本論文は序論というべきであるが、一巻の書物にもなるようなテーマを、簡潔にわかりやすくまとめた好論文と言える。ただし、自然の情としてのピエタスから徳としてのピエタスへの移行は、ただ「当たり前」のものではなくなったということではなく、そこに途上にある存在としての人間の問題性を見るべきであって、いささか分析が平凡に過ぎたように思われる。

次の山内論文『「聖化」のパレネーシス』は、第一テサロニケ4・1-12のパレネーシス・テキストを解釈したものであり、注解と言ってよい詳細な議論を展開しているが、書評子の手にも余る論題であるので、見当外れな紹介をするよりも、むしろ言及を避けるほうがふさわしいであろう。

山本論文『キリスト者の敬虔』は、トマス・アクィナスの「レリギオ」と「ピエタス」の概念を論じることによって、本書の主題に正面から応じたものである。レリギオは、倫理徳の一つであるが、「神への根本的な関係を人間が自覚し、神に仕え崇敬することを自らの義務、負目と感ずるところから成立する徳である」。したがって、人間を神への正しい秩序のうちに立てるレリギオは、人間的諸徳のすべてを神へと方向づける最も卓越せる徳と見なされるが、あくまでも目的としての神へと人間を秩序づける徳であり、神を直接に対象とする対神徳によって完成される。

他方、ピエタスは、人間が神に対してのみならず、親や祖国に対しても債務を負うものであり、その債務を返すことを自らの義務として感ずるという点で、レリオよりも広い意味を含んでいるが、われわれの父である神の崇敬という意味では、レリオと同義である。さらにピエタスは憐み深さとも解せられ、その意味では、聖霊の賜物という性格をもっている。レリオは徳としてのピエタスよりも上位にあるが、しかし賜物としてのピエタスはレリオよりも卓越している。しかし問題は、賜物と徳、特に神徳との関係である。両者の区別と関係は、おそらく簡単な上下関係では論じられない問題なのであろうが、トマスに不案内な書評子には、論者の再三の説明にもかかわらず、十分に理解できなかった。そのために、これらに関連づけて論じた最後の要約があまりにも簡略に過ぎて、いささか平板に感じられたのは残念である。

中川論文『エックハルトの敬虔について』は、『教導講話』を中心にして、敬虔の内容である「真の従順」「虚心」「離脱」を取り上げて、それぞれを分析したのちに、それらから出てくる「祈り」について述べ、敬虔が愛の行ないとして現出するとき、真の敬虔となることを論じている。しかし、『キリスト教大辞典』の説明をそのまま聖書における敬虔の意味として受け入れ、「このような聖書の意味する『敬虔』を念頭に置いて、エックハルトの『敬虔』を考察するとき、その『敬虔』にふさわしいものが、『真の従順』であり、『虚心』であり、『離脱』であるということができると、きわめて無造作に断定している。肝心のエックハルト自身によるその裏付けが示されないままに、個々の内容についての論が進められているために、それらの内容の関連が曖昧であり、したがって、「人は神の前で、神と他の人との必要に応じて、『真の従順』と『虚心』と『離脱（放念）』をもって、神に祈りつつ、どのような仕事にも誠心誠意励むことである。これがエックハルトにおける最高の徳としての『敬虔』としてとらえることができる」という結論が、いかにも唐突に見える。敬虔を構成する三つの内容がどのような内的連関を持っているのかが、明かにされるべきであろう。

『神秘主義と義認論』と題するヘグルント論文は、神秘主義神学が理想とする人間の神との合一について、タウラーの神学を中心にして、義認ないし義化の問題という視点から論じたもので、きわめて明快な論述である。神との合一を実現する方法、罪、恩寵を受ける受動性、救済論、さらにはキリスト論といった重要な問題が手際よくまとめられ、タウラー神学の特色といったものがよく描き出されている。われわれが宗教改革の神学の背景を理解するためにも、このような論文は有用であろう。

木ノ協論文『敬虔と寛容』は、エラスムスの時代と彼の思想形成の過程を明かにすることによって、いわばエラスムスの再評価を試みたものと言えよう。そして、「人間の歴史的现实における愚かさを正しく認識したという事、そしてこの認識は、人間がいかに新しいことを始めても、神の前では相対的でしかないとの認識を深める事になる。しかし、そのような有限で相対的な人間に対して、神は常に働きかけており、人間の現実を根源的に変え得るのは、この全能の神だけであるという理解が、先の認識とつながってくる」とまとめたうえで、自己に対する厳しい認識と批判、それにもかかわらず恩寵をもって働きかける神への確信、そうした姿勢から彼の寛容性が生れたことを指摘し、けっして彼が不決断ではなかったことを明かにしている。事柄を曖昧にして自分を安全地帯に置いた姿勢からは、寛容の思想は生れないことを指摘しているが、論者の最も言いたかったことのように思われる。そのことに異論はないが、しかし歴史的相対性の認識からただちに寛容性が生れるとは考えられないので、信仰の絶対性との関連で、両者の関係についてもっと論じてはしかったように思う。

倉松論文『ルターにおける敬虔』は、一般に敬虔と訳されるピエタス、フロム、フレミヒカイトといった言葉が、『キリスト者の自由』では、もっぱら正しいとか義という意味で使われているのに対し、『ヴァルトブルク説教集』では義と敬虔という二つの意味で用いられていることに注目して、ルターにおけるフレミヒカイトの意味を明かにしてから、彼の示すキリスト者の敬虔な生活について述べている。同じ言葉が両義に使われているのはきわめて興味深いが、しかし、両者の関連については論じられず、結局は義としてのフレミヒカイトも敬虔としてのフレミヒカイトも、信仰によって与えられる賜物であるとして、いわば簡単に片付けられているのは、残念と言わねばならない。そのために、後半の論述がやや浮いてしまったような印象を受ける。

最後の熊谷論文『ヘルダーリンの宗教観について』は、ヘルダーリン再評価の流れを踏まえて、彼の最大の魅力である宗教性の問題を取り上げ、彼の宗教観を論じた、興味深い一文である。カントやシラーとの関係、ギリシア世界から西欧への「帰還」を論じながら、ヘルダーリンの宗教観を生き生きと描き出している。

献呈論文集としては異例かもしれないが、ご本人の印具博士による、アンセルムスに関する二編の特別寄稿は、いかにも博士の人柄をしのばせるものであり、またこの論文集が醸し出す暖かな雰囲気をよく表わしている。